ふる里の散歩路 (6)

谷台から牛熊へ

「秋風身にしむ候と相成候、愁いなき此の身には物の悲しさを覚え申さず、至極嬉しく楽しく暮し居り候」これは明治から昭和初期にかけての評論家徳富蘇峰の或文章の一節です。今月は、百舌鳥が啼き赤蜻蛉が飛交う明るい山里としての旧大総村谷台から牛熊にかけてのコースを案内して見ましょう。

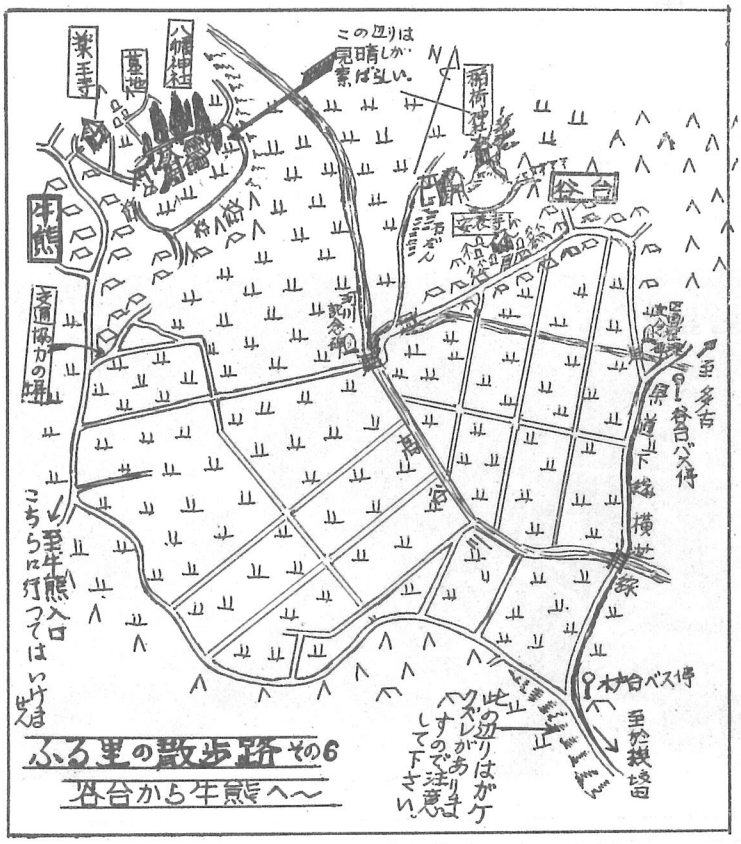
横芝駅発多古行のバスを利用し谷台入口で下車します。バス路線と別れて正面に見える部落に入って下さい。右手に区画整理紀念碑が建っている橋を渡ると谷台の部落です左右に岐れる路には気を止めず、道路添の家並を縫って進みますと部落のほぼ中央右手に苔むした石段があります。これが谷台部落では集会所にも利用している安養寺です。建物の裏手には、権大僧都法印永隆、文化一年という年号等が辛じて読取れます。ここで一まず水筒の水を詰かえる等して足ごしらえを整えて改めて出発しましょう。

部落の家並が外れて小さな橋にさしかかりましたならばすぐ右に曲って下さい。約五十米歩きますと突然石の鳥居が現れて勾配の急な石段が見えます。これが谷台の鎮守様荷様です。石段は四ケ所の踊場を持ち総計で百十四段あります。境内の見晴はよく、特に部落越に望みますと右は木戸台、左は光町宝米の台地に挟まれた田圃が区劃整理の跡も整然と開けて人工と自然のコントラストを見事に出現させています。

谷台の部落に別れを告げて渡る流れは高谷川で千代田村菱田に源を発して此の附近の田の灌漑となり末は栗山川に注いでいます。此々の水門から約一粁一前方に松の古木がそそり立って見える丘が牛熊部落ですから田圃の中を縦横に走るどの路を利用しても牛熊の部落に到達できます。途中の路端には枝豆が大分作付されていてその殆んどが牛熊寄で、木戸台寄には全くないのに気が付くでしょう。〃昔木戸台の神様と牛熊の神様が争いましたが牛熊の神様は田圃の畦に生えていた豆を投げつけ投げつけ木一台の神様を攻めました。ところがそのうちに木戸台の神様の目に豆の粒が命中して木戸台の神様が敗けてしまいました。それからは木戸台の人達は誰も豆を作らなくなった〃ということです。

牛熊の部落に入りますと突当りの農家のコンクリート塀の一部がフェンスに取かえてあります。この農家の主人桑原良夫さんが塀を造ったところ交通の見通しを遮るので危険である、というところから折角のコンクリート塀を壊してフェンスにしたということです。この心温まるエピソードの桑原さんの屋敷添に右折し部落の中に入ります。道路は間もなく左折しますが、これを曲らず直進して下さい。そしてこの路が上り坂になり今度は下りになろうとする辺りから右の路に入って下さい。念のため近くの家で「八幡様に行く路」とたずねると安心です。この路に入るとすぐ左手に見える古びた山門が天台宗の薬王寺です。この薬王寺は一時相当栄えたことが有ったようですが今は無住の寺で谷台の安養寺同様部落の集会所等に使われているようです。

コースは此の寺を後にして門前を直進します。この路は坂田城主累代の尊崇を得たと伝えられる八幡神社の参道に通じ何時か辺りは薄暗くなる数百年の樹齢を数える古松老松が頭上を覆い始め、境内には、社殿、拝殿、飾御輿庫、祭御輿等の他、末社の祠が其処彼処に点在する等、由緒ある往時が偲ばれてまいります。縁起を繙きますと、「祭神は誉田別尊と木花咲耶姫命にして大同二年宇佐八幡を勧請し承安二年には平重盛の命を受け上総忠光が楼門、宝塔を建立す。後世に至り坂田城主三谷、井田両氏からそれぞれ神領の寄進あり云々」とあります。しばし昔を偲び懐古の情に時を過したならば、神社の横から裏に通ずる農道に出て見ましょう。今までうつ蒼とした神苑の壮厳さから抜け出した秋の明るさは眼に痛い位です。広々とした畑路をたどってまいりますと、やがて眼下に開ける海匝の平野が素晴らしい眺望を満喫させてくれるでしょう。此の辺りの畑路は次第にせまくなり遂に消えてしまいますが畑と畑の間を一列に歩く程度ならば別に叱られることもありませんので充分秋の楽しさを味わって下さい。

帰路は畑の合ノ道をたどり薬王寺を訪れて一息入れてから出発しましょう。薬王寺は無住ですが周囲の畑は総て所有者がありますので、野菜や南瓜等を荒らさないようにして下さい。仕度が出来ましたならば元の路をフェンスの桑原さんのお宅まで戻り案内図に従って木戸台バス停まで歩き此々から横芝行に乗って下さい。

（帰路でバス停をたずねる時、「木戸台」と聞いて下さい「木戸台入口」という停留場もありますから間違わないで下さい。）